

◆連載-Vol.24

# 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

**中谷 正人** (なかたに・まさと)  
1948 神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年~2014年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

## 現代建築の開拓者たちとその軌跡 6

### 吉阪隆正 大地に挑む

吉阪の建築作品には量感のあるものが多い。代表作とされている1965年に東京・八王子に竣工した大学セミナーハウスで、大地に楔を打ち込んだような造形に仰天したのは大学1年のときであった。まだ建築には全く無知なときでもあった。まあ、今でもあまり変わらないが。

日本建築学生会議(JCAS・通称ジャカス)が主催したセミナーで、このときにはすでに執行部に、何もわからないまま入れられていた。というのは、大学に入り麻雀しかすることがなかった1年生を、いきなり執行部に放り込んでくれたありがたい先輩がいたからである。70年安保の動きが始まる前で、まだノンビリとした時代だった。

会議に出席したらいきなり企画委員会に入れられた。当時有名だった建築家の講演会やらセミナーの企画・運営を手伝ったもだが、そのおかげで大高正人、沖種郎、池田陽、黒川紀章などと直に接することができた。このことはその後の編集者時代も、そして今でも役に立っているのだから、JCASの先輩諸氏にはいくら感謝しても足りない。

編集の仕事に就いてすぐのころ、メッセンジャーボーイよろしく吉阪の原稿を受け取りに新宿・百人町のご自宅(1955)にうかがった。そのころ庭は武蔵野の面影といえどカッコいいが植木と雑草が覇を競い合っている状態だった。まるでジャングルを掻き分けるようにしてピロティの下にたどり着き、玄関の扉をたたくと吉阪が出てきて、「チョット待ってね」。

家の中を覗き込むと書類やら書籍やらで溢れかえっており、その奥から原稿を持って再度現われ、「これだから家の中には入れられないんだ」と、淡々と言われたのがなんとも親しみを感じさせてくれた。

このときのタイトルは「かんそうなめくじの弁」で、「かんそうなめくじ」のイラストが添えてあった。このイラストが面白く、いくつも縮小コピーをつなげて「かんそうなめくじ野」と称し、4ページにわたる巻頭言の上部に飾り野のようにした。もちろん編集部では賛否両論だったが、結果的には使ったのだから…。

「かんそうなめくじ」は3回ほど登場したと思うが、とくに記憶に残っているのは、なめくじが南半球に行き、木陰で昼寝をした挿話。太陽の動きを見て、しばらくたっても陽が回らないような位置に陣取ったが、南半球だから太陽が逆に動き、おかげで「かんそうなめくじ」になってしまったという顛末。

「当たり前」ということが習慣的なものだけではなく、自然の中にもあり、経験則も時として裏切られることに、改めて気付かされた気がした。

これに限らず、視点をチョットずらすことによって浮かび上がる事象を捉えた文章であるが、それが文明批評であり建築批評ともなっていた。その他のエッセイも含めて1982年には『乾燥なめくじ—生ひ立ちの記』として相模書房から刊行された。

吉阪の作品はヴェネツィア・ビエンナーレ日本館(1956)にも訪れた。ビエンナーレの期間中ではなく、何も展示されていないカラッポだったが、自邸同様、ラフなRCの打放しとピロティの取合せは、まるで大地から湧きだしたような量感と力強さを感じさせた。RCのラフさは師でもあったル・コルビュジエ譲りのものだろうか。

このような印象を受けるのは八王子のセミナーハウスでも同様である。湧き上がるのではなく、大地と同化しようとするかのごとく、建築は大地の存在としっかり対峙している。吉阪は建築と大地とは切り離せないものとして感じていたのではないだろうか。おそらく「浦邸」(1956)や「ヴィラ・クウクウ」(1857)などにも同じような存在感と重量感を感じることができるし、「日仏会館」(1960)や「アテネ・フランセ」(1962)も然りである。

なお、八王子のセミナーハウスでは学生時代に東孝光をはじめ建築評論家の佐々木宏や大編集者の植田実などにも会うことができた。その意味では、JCASのセミナーにおいて初めて建築界に直接接触したことになる。1968年のことだから50年、半世紀も前にもなる。嗚呼。

### 芦原義信 都市景観の創造者

吉阪より1年後に生まれた芦原は東京帝国大学を卒業して帝国海軍の技術士官となり、終戦後に坂倉準三のアトリエに入った。そしてハーバード大学大学院修了後、マルセル・ブロイヤーの事務所に入所。帰国後に芦原義信建築設計研究所を開設し、「建築の外部空間に関する研究」で博士号を取得。さらに武蔵野美術大学の建築学科創設(1965)にもかわり、初代主任教授として教育においても功績は大きい。

博士論文は、その後『外部空間の構成／建築から都市へ』のタイトルで1962年に彰国社から出版され、当時の建築学生には大きな影響を与えた。また、この年に東京大学工学部に都市工学科が創設されたのも、建築家の役割が単体としての役割が単体としての建築から都市へと広がる本格的な契機

となったし、おそらくその後が始まる都市景観という概念を始めて提示したのではなかったか。

というのも、近代における都市景観はオスマンがパリ計画で高さを揃えたものに倣っている。皇居前の建物の高さを100尺でそろえたのもそれであった。これらは遠景からの統一感が主体であり、いわば為政者の視点である。それに対して、芦原が主張したのは人の目線からの計画であった。

そんな芦原が、熊本県の「八代市厚生会館」(1962)の完成に寄せて、建築によって都市に外部空間を作り出したと表現した。実際に建物自体はL字型で、2方向は都市軸である大通りと都市の歴史である城の石垣によって構成されている。ところが、4年後の1966年に完成した水戸市の「茨城県民文化センター」は3方向を建物が囲み、残りの1方向のみが大通りに面してる。つまり、ここの中庭は都市軸以外はすべて芦原が設計した建物で囲まれた空間である。

「茨城県民文化センター」と同じ年に完成した東京・銀座・数寄屋橋交差点に面した「ソニービル」は都市建築としてもインパクトが強かった。

ソニーは日本初のトランジスタラジオを製造販売した。今ではラジオもテレビもステレオもすべてトランジスタやLSI主役だが、それ以前はすべて真空管であった。テレビもパソコンのモニターも、今では液晶だが、かつてはブラウン管で、真空管同様、温まるまで、つまり機能するまでに時間がかかった。それを手のひらに載るサイズにしたのがソニーだった。まさに技術の最先端をいく企業だったわけである。

「ソニービル」の外観を特徴付けたのは、エレベータシャフトの外側に地上から塔屋までビッシリと並べられたブラウン管2,300個。そして来場者は最上階までエレベータで上がり、4分割されてスキップフロアとなった各フロアを歩きながら降



大学セミナーハウス



茨城県民文化センター

ソニービル  
写真出典: ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)

りてくる。外観から内部空間の構成まで、すべてが新しい空間体験であった。

「ソニービル」はモダニズム建築の重要建築物のひとつとしてDOCOMOMOに選定されていたが、2017年3月末に閉館し、解体される。この近辺は日劇、東芝ビル、朝日新聞社など、建築史の教科書に載った建物がどんどん消えてゆく。

「八代市厚生会館」の非常用出口だろうと思うが、勾配の緩やかな外部階段がついていた。大きな壁面と出入り口の枠と階段という実にシンプルな構成なのだが、フラットバーを水平に並べた階段の手摺子が目を惹いた。見たことがあるなあと思って調べたところ、マルセル・ブロイヤーの自宅の外階段の手摺が似たようなデザインだった。やはり弟子だったというべきか。

話は逸れたが、「茨城県民文化センター」こそ芦原が建物と都市とを対峙させた記念碑ではないかと思う、と芦原に直接言ったことがあった。今でもそれが1995年のことだと覚えているのは、「オレは今年(平成7年)の7月7日に77歳になるんだ」と言われたからだ。

そのとき芦原はすでに芸術院会員となっており、面と向かってそんな生意気な口を利くヤツはいなかったのだろう。そのときは礼儀正しく興味も示さず「あ、そう」と一言。ところが、数日して芦原からはがきが届いた。そこには、「君が言ったこと、気にかかっています」とあった。真面目な人だと改めて思った。

一方で青山に富士フィルム東京本社(1969)を設計したとき、外壁のスリットを赤と青に彩色した。この理由を施主に問われて、赤は赤坂方向を向いており、青は青山方面を向いているからだと言ったあたりには、茶目っ気も感じられる。

一度だけであったが芦原が運転する車の助手席に乗せていただいた。ようやく降りたとき、二度と乗るまいと誓った。(続く)